九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもをめぐるモノづくり ： 産育の技術文化を旅する

坂元, 一光
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座 ： 教授

https://doi.org/10.15017/2928828

出版情報：大学院教育学研究紀要. 22, pp.1-10, 2020-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学研究紀要，2020，第22号（通巻第65集），1-10
Res. Bull. Education, Kyushu U., Vol.22, 1-10

子どもをめぐるモノづくり

── 産育の技術文化を旅する ──

坂　元　一　光

はじめに

子育ての生活用品や道具には子どもの健やかな成長を願う親や大人たちの切なる思いが込められている。そしてそれをカタチにするのがモノづくりの営みであり技術・技法の知識である。こうした技術・技法の中には人知を超えた存在や力に働きかける知識も含まれている。小論では筆者がフィールドで出会った子育て道具や信仰のモノづくりの事例から，各地域や民族，時代ごとの産育文化を生み出す技術・技法の固有性や普遍性を見ていこうと思う。近年の人類学的技術論や技術哲学等の新しい研究動向とも呼応させつつ，人びとの暮らしに深く根を下ろした技術・技法とそれが織りなす個性豊かな子どもや産育の世界を紹介してみたい。

１．ブリコラージュと身体技法

人類学的視点からモノづくりについて考える際に想起される概念として「ブリコラージュ（bricolage）」と「身体技法（technique of body）」がある。これらは人類にひとしく分かち持たれた普遍的技術の文化相である。「ブリコラージュ」は「器用仕事」と訳され，身の周りにある材料や資源を即妙に使ったモノ・コトづくりのことを指している。ありあわせの材料を使って当座に必要なモノ（場合によってはコト）を臨機応変に作ってしまう技術（知）のことで，一般庶民の生活の知恵や工夫に相当すると考えてよい。フランスの人類学者レヴィ＝ストロースは決められた部品や手順のマニュアル化を特徴とする現代の科学的，工学的な思考「エンジニアリング」に対比させて，「ブリコラージュ」の語を「未開社会」特有の創造的な「野生の思考」と特徴づけた。これは庶民生活のほかにアート世界のコラージュ技法や子どもたちが身の周りのガラクタや自然物から生み出す遊びの世界にも見出すことができる。ちなみに本論の事例では古着（端切れ）を再利用して子どもの「吊るし飾り」や「寄せ着物」を作りあげる祈願の和細工にその技法を見ることができる。

一方の「身体技法」は人間の身体づかいの方法を指す技術概念で広くモノ（身体や道具）づかいの技術であり，またモノづくりの前提となる道具使いの局面がそれにあたる。フランスの民族学者M・モースは歩く，泳ぐ，座るなど各々の社会に独特の身体の用い方を身体技法と呼んだ。身体技法の考え方では，人の身体はある目的を達成するために使用されるもっとも基本的な道具であり，

その用い方（技術や知識）は社会的に伝承される。例えば民族独自の子どもの抱き方や運び方，出産の方法にいたる産育の技法も身体技法のひとつであり，本論ではウイグル族が揺りかご使用時に用いる子どもの固定法（swaddling）がそれにあたる。また身体技法の概念は職人の巧みな道具づかいに見られるように身体の使い方と道具を一続きの技術的プロセスととらえる視点を含んでいる。これはたとえば吊るし飾り作りにおける女性の刺繍針を用いた熟練の手芸技術に見出せる。こうしたブリコラージュや身体技法の視点はわれわれの暮らしの足元から人間の技術・技法（モノづくり／モノづかい）についての再帰的な思考をうながし，人間の「技術環境内存在」（村田2013）としてのあり方をあらためて気づかせてくれる。さらにそれはモノづくりとモノづかいの技術を一連の社会的過程として統合的にとらえる視点にもつながっていく。

２．子ども用品の誕生と工業的モノづくり

近代以降，欧米社会を中心に子ども用品の市場は急速な広がりを見せ，たんなる「大人もの」のダウンサイジングではない「子ども仕様」のモノづくりがひとつの生活文化の領域を形成するようになった。これにはフランスの教育思想家ルソーの「子どもの発見」を源流とする子ども期に固有の価値を認める考え方が大きくかかわっており，日本でも大正時代以降こうした思想とモノが期を同じくして導入されてきた。

子ども向けにつくられた生活用品，なかでも工業製品としてのそれはヨーロッパに起源する。イギリスのデザイン史家エイドリアン・フォーティーは『欲望のオブジェ』（2010）において当時の製品デザインがジェンダー，子ども，社会階級によって差異化されていく歴史的，社会的過程を描き出した。かれは製品デザインをデザイナーの独創性からではなく企業家や社会の欲望によって生み出されるという視点に立って，子どもやジェンダー，社会階級ごとに差異化されるデザインについて論じている。かれは「19世紀の末から量産されはじめる中産階級の子供むけの陶磁器やファニチュアは，いかにもそれらしくパステル調に塗られ，動物の絵とか同様の情景で飾られていた。こうしたものは，子供が自分で買うことはまずなく，それらの姿かたちも，子供自身の望むものというより，子供の必要を自分たちのそれとは異なるものとして見ようとする大人の願望にかかわるところが大きかった」（フォーティ2010：90）と，子ども用品の普及の背景を大人の子どもへの特別なまなざしに関連づけている。

日本の場合はどうなのか。同じくデザイン史の視点から神野由紀は玩具，衣服，家具，部屋，文具，菓子など具体的な商品（モノ）の生産・消費の拡大の歴史的検討をとおして「市場における子どもの発見」があったと指摘する（神野2011）。そして子ども用品市場の急速な広がりを学校制度や家庭教育の拡大にともない都市中間層を中心に「教育の対象としての子ども」像が社会に浸透する過程と連動した現象であるとする。子ども向けの商品あるいはデザインは，大正期の産業発展と手をたずさえて，児童を教育的な研究対象とする視線，子ども用品を懐古趣味の対象とする視線，子ども用品を新しい商品市場とみなす視線，など当時の「交差するまなざし」のなかから生み出され

たのだ。

そして現代，大人のまなざしのなかで確立された子ども用品の市場とモノづくりは工業技術の発展によって更なる進化を見せている。急速に発展してきた今日の子ども用品の市場では，製品それ自体の優位性をめぐって日々熾烈な販売競争がくりひろげられており，その鍵を握るのが類似の製品群からの差異化の手法（デザイン）である。たとえば近年日本では「キッズデザイン」（特定非営利活動法人キッズデザイン協議会）としてこれまでの子ども向け製品群との安全・安心面での差別化をめざす社会的なデザイン運動が展開しつつある。キッズデザインの場合は子ども中心主義的まなざしを継承する一方で，「子どもの安全・安心」への配慮と人間工学的に再構成された「子ども目線」を特徴としている（坂元2013）。一方，日本が先導するこうしたキッズデザインのモノづくりには子どもに対する配慮とともに企業や国家の思惑も見え隠れする。顕彰制度や普及運動をとおして企業の技術開発や国家政策がデザインに組み込まれてゆく様子からは技術・デザインの社会的性格があらためて浮かび上がる。

３．ウイグルの揺りかご　ー民族技術のモノづくりー

現代につながる工業的なモノづくりを見てきたところで次に人類学や民俗学が好んで取り上げてきた民族社会や伝統社会における産育のモノづくりを見てみたい。

中国新疆ウイグル自治区における「ビュシュック（揺りかご）」との出会いは，産育文化に根ざしたモノづくりや産育技法を考える上できわめて印象深い経験であった。ウイグルではビュシュック作り，スワドリングの育児慣習（産育技法），そして産育儀礼での祈りの技法がビュシュックを中心に撚り合わされ独自の産育の技術文化を生み出している（坂元他2008）。

トルコ系民族のウイグル人はヨーロッパとアジア（日本）をむすぶ交易ルート，かつてのシルクロード沿いに居住するひとびとである。彼らは伝統的にビュシュックと呼ばれる揺りかご（揺籃）を用いた子育てを行ない，同様の子育てはカザフ，キルギス，ウズベクなど他のトルコ系諸族の間でも見られる。生まれてきた子どもは生後７日目から１年余りビュシュックで育てられる。それにはまた子どもの身体を布で巻いて固定（拘束）する「スワドリング」の育児習慣がともなっている。さらに子どもの無事と成長を願って行われる数々の産育儀礼もビュシュックを中心に行われ，そこにはもうひとつの技術の相として民族独自の「祈りの技法」がみられる。

地場産業のビュシュックづくり

ビュシュックはポプラの木を材料に家内工業で作られる。新疆の西端の町カシュガルにはビュシュック作りを地場産業にしている通称ビュシュック村がある。タワリ・カディルはその村のビュシュック職人である。彼はウイグルの著名な伝統工芸士として小学校の国語教材にも取り上げられるほどの名人である。彼の作業場は自宅の庭と隣接する広い敷地である。ポプラの原木がうず高く積み上げられている敷地の作業場では原木からさまざまな部位を削り出し，弟子たちとこれを組み立てる。自宅の庭では奥さんや息子が組み立て上がったビュシュックに色を付けその上からワニス

塗る作業を行っている。彼の作るビュシュックは新疆で広く知られており，ウルムチやホータンなど遠方からわざわざ買いに訪れる人も多い。

スワドリングの産育技法（写真１・２・３・４）

ビュシュックそれ自体は木製の長方形の入れ物といったところでそれほど複雑な構造をしているわけではない。しかし組み立ての過程を見ていると面白い特徴に気づく。底板に空いた20センチほどの丸い穴とその下に小さな引き出しが設らえてあるのだ。じつはこれは寝ている子どもの排泄物を受け取るための工夫なのである。引き出しに砂や灰をしいて排泄物がたまると引き出して捨てるのである。なかなか考えられた仕掛けだが疑問も浮かぶ。寝かせられた子どもはその穴から上手に糞尿を落としてくれるのだろうか？揺りかごのなかで動かずじっとしてくれるのだろうか？この疑問に応えるのがスワドリングの習俗とシュメッという排尿の補助具である。スワドリングは子どもを固定する産育技法でトルコ系諸族以外にも世界中で見ることができる。ウイグルでは子どもは布で体をぐるぐる巻きにされた上で，さらに二本の布のベルトでビュシュックのなかに（お尻の部分

（1）ビュシュックの母と子（カシュガル）

（2）シュメッ（左：男児用，右：女児用）

（3）スワドリング（カシュガル）

（4）ビュシュックの構造（カシュガル）

が穴の上にくるように）固定される。では排尿はどうするのか？ここでシュメックの登場である。男児用のシュメックはちょうど喫煙具のパイプに似た形状と構造を持つ道具で羊の骨や木で作られる。パイプでいえばボウル（煙突部分）に子ども（男児）の性器をはめ込み管を通して尿を底の穴へと誘導する。女児用はボウル部分を取り去った形状になっている。こうしてスワドリングの技法とシュメックの道具によって子どもは長時間ビュシュックに入れられても清潔が保たれるのである。

祈りの技術・技法

ウイグルのビュシュックに関わってもうひとつの技術に触れておきたい。それは子どもの無事と成長を願う祈りの技法である。日本でも子どもの無事成長を祈る産育儀礼は盛んだがウイグルでもさまざまな儀礼が行なわれる。「ビュシュック入れの儀礼」,「40日目の儀礼」, その後の「ビュシュック祝い」などの産育行事がビュシュックを中心に行なわれる。ビュシュックは祈りの場面でも存在感を示している。儀礼を技術や技法の次元で考えるのには違和感もあるかもしれないが，産育儀礼をはじめ儀礼を正しくしきたり通りに行うにはそれなりの知識や所作が必要である。人類学の観点からいえば呪術から宗教施設での祈りの作法までもが信仰や宗教生活を支える大切な技術・技法のひとつである。「日々の糧を得る生業・生産活動から儀礼や祭祀などといった象徴的行為に至るまで,「知識」や「技能」に基づく技術的実践とみなしうる」（大西秀之2014：２）のだ。

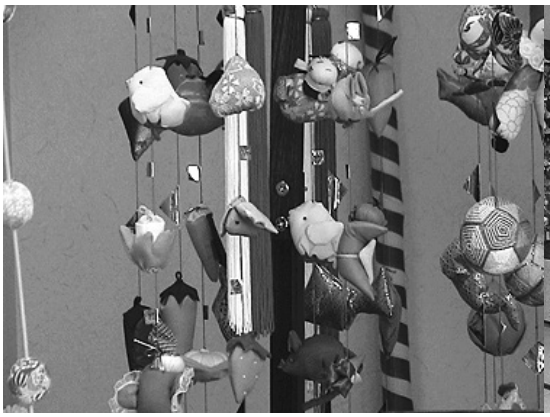
ウイグルのビュシュックをめぐってはモノとコトを貫いて織りなされる豊かな民族技術の世界が見いだされ，それらは互いに関連し合いながら全体として独自の子育て文化を形づくっているといえる。

４．日本の吊るし飾り　ー民俗技術のモノづくりー

ウイグルの産育儀礼に見出した祈りの技法を受けて，今度は日本の産育の祈りに関わるモノづくりに目を転じてみよう。取り上げるのは「吊るし飾り」と総称される伝統の手芸細工の習俗であり地域の女性によって子ども（女児）の無事成長や子孫繁栄を願うモノづくりである。それはまたブリコラージュの知にみちた民俗技術のモノづくりでもある（坂元2014)。

女児初節供のさげもん（写真５・６）

福岡県柳川市のひな祭りでは一般的なひな人形とともに華麗な「さげもん」と呼ばれる和の細工物を吊るし飾る。女児の初節句を迎えた家庭では，雛壇飾りの左右に縁起物の動植物や人形をかたどった細工物がすだれ状に吊り下げられ，祝いの空間に華やかな彩りを添える。昔ながらのさげもんは女児の母親や祖母が子の無事な成長と幸せを祈りつつ古い着物のハギレを材料に手作りで準備してきた。近隣や親戚の女性たちも手作りし祝いの品としてこれを贈ってきた。初節句の祝い品であるさげもんには子ども（女児）に対する人々の期待や願いが集約される。さげもん輪に吊り下げられた49種の動植物や人形の手芸品には，それぞれ子どもへの願いや期待がシンボリックに表象されている。近年，柳川のひな祭り習俗は地域振興の取り組みのなかで観光イベントとして再構築され，季節のさげもん飾りも地域の伝統手工芸品として一年をとおして観光客の目を楽しませるよう



（５）柳川のさげもん細工

（６）柳川のさげもん飾り（御花）

になった。

柳川のさげもん作りは江戸期の日本女性の手芸文化の流れを汲んでおり，もとは町の富裕層の女性によって作られていた「裁縫お細工物」と呼ばれる手芸品に由来する。その技術である裁縫や手芸は当時の女性が身に付けるべき必須の生活技術でありたしなみであった。しかしそれが地域の習俗に組み込まれることで裁縫の汎用技術は固有の地域性と歴史性をおびた独自の技術へと変貌する。すなわち裁縫という汎用技術と地元の初節句行事のしきたりや細工物のきまり事がさげもん作りのプロセスにおいて結びつくことで独自の民俗技術へと姿を変えるのである。習俗や行事は一般的な生活技術を地域固有の生きられた民俗技術へと変容させる創造的文脈を提供しているのだ。

祈願の傘福（写真７）

同じような吊るし飾りは東北山形の港町酒田にもある。酒田の吊るし飾りは柳川のそれとは異なり祈願の奉納物や祭礼の山車の飾りに用いられてきた細工物である。地元では「傘福」と呼んでい

（７）祈願系の傘福（酒田市）

る。酒田の傘福（平成傘福）の特徴はまず吊るし飾りをつるす傘にある。和傘の縁に短い幕をたらし傘の骨から数十個の和細工を吊るしさげる。吊り下げる和細工は豊穣や多産，富貴にちなんだ縁起物が主である。地域の行事や祭りに傘福のつるし飾りを見るようになったのは実はここ10年ほどのことである。現在の傘福は商工会議所の記念事業として「地域の伝統文化の次世代継承と観光振興」を目的に既存の二系統の伝統傘福（習俗）を融合させて作り出されたものなのだ（坂元2012）。遠来の観光客にとって昔からの伝統手工芸に見える傘福は地域振興のために二つの異なる習俗を融合させ創造された新しい伝統なのだ。既存の伝統習俗を臨機応変に組み合わせて新しい伝統を作ってしまうブリコラージュの発想がそこに見出せる。

平成傘福の元になっているのは「祈願系」と「祭礼系」の二系統の吊るし飾り（伝統傘福）である。そのひとつ祈願系の傘福は庶民の民間信仰をもとに女性によって作られ奉納された切実な祈願のための一種の民具（呪具）である。祈願系の伝統傘福は子授けや子育ち，五穀豊穣などを願って地域の女性（檀家，氏子）によって古着のハギレで手作りされ，奉納者名（あるいは講名）の短冊とともに寺社に奉納されてきた。これに対し祭礼系のそれは酒田の大祭礼（山王祭り）の渡御行列に登場する華麗な傘鉾飾りを原型としている。祭礼系の場合，もとは祭りの傘鉾ということで吊り下げられるのは鯛や巾着，蔵のカギなど商売の繁盛や招福をかたどったものが中心で，専門の職人の手で豪華な布を使って作られた。酒田の伝統の傘福をめぐっては古着の再利用（祈願系）や二つの伝統の融合，生活習俗の観光資源化（平成傘福）など二重三重のブリコラージュの技法が見られる。

５．子どもを守る呪術的技法

最後にもうひとつ手芸技術を用いた祈願のモノづくりを紹介しよう。それは日本の伝統的な産育習俗である「背守り」と「寄着物」に用いられる刺繍である（佐治ゆかり他2014）。前者は子どもを邪悪な霊から守るために着物の背面にほどこす縫い飾りである。糸じるし，ざくろ，亀，蝶，蝙蝠といった吉祥文の刺繍からはつるし飾りの華やかな細工物が思い起こされる。「寄着物」は「百徳（ひゃくとこ）」とも呼ばれ，子どもの無事成長を願う親が村人からハギレを集め縫い合わせて産着や子どもの着物を作りその無事成長を願う習俗である。子どもが着物を着なくなってこうした習俗は見られなくなったが「百徳」は今も金沢の真成寺の奉納物として人びとの手で作られている。

「背守り」も子どもの無事な成長祈願を目的としているが，どちらかというと悪霊や災いから子どもを守る呪術的手段（技術）としてのモノづくりである。ではなぜ背を守るのか？背中は自分では見ることもできず身体のなかでももっとも無防備な部位であるからだ（安井2014）。とりわけ生まれて間もない子どもの場合，さらにその危険は増す。子どもを悪霊や鬼の災いから守るために身体のなかでも特に脆弱な部分を注意深く防御しなければならない。子どもの着物の後襟下の刺繍や飾り物はそうした目に見えない災いを払いのけるための親の思いを込めた呪術的造形なのだ。

また近隣の子どもの古着（ハギレ）を集めて縫い合わせる「寄着物」にも呪術的な祈りの技法が見られる。それはちょうど千羽鶴や戦時中の千人針の習俗に見られるように一人の力ではなしえな

い事柄を仲間たちの力（思いや念）を結集して成し遂げようとする祈りの技法である。一方でこの「寄着物」には子育てに対する人びとの協働的な姿勢も見出される。村人の協力を得て集めたハギレを縫い合わせるという手法には村中の人びとが力を合わせて子どもの成長を見守り支えようとする共助の技法が暗示されている。

おわりに

小論では子どもをめぐるモノづくりの技術的営みを世界や日本の事例から見てきた。それは人類に共有されてきた普遍的な技術・技法，たとえば道具製作や身体技法，ブリコラージュから，民族や地域ごとに継承されてきた伝統技術，さらには現代の工業技術までひろく包含するものであった。ウイグルの事例では「ビュシュック（揺りかご）」を中心にスワドリングの育児技法や産育儀礼から独自の子育て文化が構成される様子が見られた。日本の「吊るし飾り」や「寄着物」の事例では，古着の再利用や習俗の転用（雛祭りの観光資源化）のなかにブリコラージュの技術・手法が見出された。また「吊るし飾り」や「寄着物」制作時の裁縫や刺繍の技術は，針という道具を巧みにあやつる女性の手ワザの身体技法にほかならず，それは土地の習俗のなかに溶け込むことでひとつの民俗技術へと変貌していた。子どもをめぐるモノづくりの旅から見えてきたのは，地域や民族の技術・技法によって織りなされる多彩な産育文化の姿であり，その技術・技法に込められた子どもへの思いであった。

＊　小論は福島県伊達市による地域創生事業「地方創生，子ども，インダストリー」（2016年度）の研究会用副読本の一部として準備した原稿が元になっている。諸般の事情から冊子化が実現せず宙に浮いた状態にあった当該原稿に加筆修正をほどこし本誌論文とした。

＜参考文献＞

大西秀2014『技術と身体の民族誌－フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸－』昭和堂
神野由紀2011『子どもをめぐるデザインと近代』勁草書房
村田純一2013『技術－身体を取り囲む人工環境－』（知の生態学的転回２）東京大学出版会
坂元一光・アナトラ＝グリジャナティ2008「ビュシュック（揺籃）育児とその再編－中国　新疆ウイグルの産育文化の一側面－」『九州大学大学院教育学研究紀要』第10号 pp.59-78
坂元一光2012「伝統を創造する女性たち－酒田の傘福復興と事業と地域学／地元学－」『国際教育文化研究』，第12号，pp.1-15
坂元一光2013「子どものためのモノづくりと差異化の技術・デザイン」『国際教育文化研究』，第13号，pp.1-14

坂元一光2014「愛でる身体と作る身体－柳川の伝統手芸活動における技術的実践－」『国際教育文化研究』第14号，pp.1-13
佐治ゆかり2014『背守り：子どもの魔よけ』LIXIL 出版
フォーティ・A 2010『欲望のオブジェ（新装版）』（高島平吾訳）鹿島出版会
安井眞奈美2014『怪異と身体の民俗学－異界から出産と子育てを問い直す－』せりか書房

坂　元　一　光

“Manufacturing (*Mono-dzukuri*) ”surrounding children: Looking at Technological Cultures relating to Children and Child-raising

Ikko SAKAMOTO

What gives concrete shapes to living wares and tools surrounding children is the practice of “manufacturing, so-called Mono-dzukuri” and what support that is our own technology and knowledge. In this paper, the Author introduces Japan’s “Kid Design” products, the Uyghur cradle (Buxuk) and the Japanese traditional “Hanging ornament” as items among the living wares and tools relating to children and child-raising that he has encountered, he then explains the technical characteristics and cultural background of each. While referring to new trends in technical research in the areas of recent cultural anthropology and philosophy, the author will clarify the practices of “manufacturing” unique to each culture relating to children and child-raising, and the technical platforms of “technique of body” and “bricolage” found in common between those cultures.